

# 十二・解明された『華城八景』の謎、美しい大坂城木版画を探る

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

大正7年(1918年)9月に華城八景という名の折帳における大坂城の木版画帳が販売された。京橋朝市、川崎堤春月、川崎堤春霄、筋金門時雨、算盤橋春霄、鳴野橋秋漁、法眼阪霞色、法圓阪霞色、桃谷春色、玉造口雪旦と大坂城の春夏秋冬を描き、極めて美しい幕末の情景を髣髴とさせる。同年10月版には著者、故・玉手棠洲と記されているが、9月版には明記されていない。発行元は美術風俗文芸書林新古浮世絵版画売買だるまやとある。謎ときに挑んだ喫角は大判の『大阪城八景』と、今年10月に入手した『錦城二十勝』という肉筆画帳、さらに二十年前に発見した1枚の出版案内である。この間、入手した類書は10点に及ぶ。

調査の結果、錦城(金城)二十勝は玉手棠洲の肉筆原画であり、氏は、幕末明治の大坂の日本画家、寛政6年(1794年)生まれ、明治4年(1871年)に亡くなられていた。二十勝之内五図は華城八景の原画であった。発見された出版案内にも存在を明示しているが、この後、八景の原画が存在した。「華城八景画帳発行の趣旨」によれば、「浪華後素界の一名家たりし、玉手棠洲画伯が、丹精の筆に成りし、華城八景の名画、生前事に因て発行の機を逸し、空しく或る好事家の筐底に秘蔵せられしを、弊堂一見して遺憾の想に耐ず、強て之を譲受け、肉筆以上成る高尚優美の版画と為し、一卷の画帳に因て、美術的に、文芸的に、歴史的に、昔の大坂城の内外を觀、併せて大阪市の推移を知り、趣味と利益の二を兼る事」とある。

桐箱入、画帳壱冊正価金七圓五拾銭とし、編輯人宇田川文海、出版兼印刷所東巻辰次郎、発行兼販売所歡喜東巻堂とある。美しい版画は東巻辰次郎によって、肉筆か

ら、明治初期に版画へと世に出されたのであった。

ところが、この華城八景という名の画帳はこの時点では存在しない。手元にある画帳は桐箱入りで美しいが大坂城八景とされている。今でも華城という雅号が大坂城と認識される方はいない。おそらく、計画では華城八景としたものを直前になり、わかりやすく大阪城八景と変更したものと思われる。謎を深めたのはあれほど玉手棠洲を絶賛しながら、画帖としての作者は明記されていない、わずかに版画に数mmの朱印が絵柄として描かれるのみであった。この大坂城八景は画帳ではあるが、絵柄のところは大判の1枚版画で、後の華城八景のように折れはなく美しいものであった。

大正7年に版權を取得した木村助次郎は『華城八景』の名を復活したが、再版時に、華城八景題詞宇田川文海述緒言大阪城沿革大阪城城内の大体、慶長年間大阪城之略図が省かれたのは著作権の問題であろうか、価格の問題であるのか不明である。また、彫師を明記し復刻とされるが、見事に差異は読み取れない。

五十年以上にわたり、華城八景の謎を追い続けた。ごみのようなチラシや骨董商が持ち込んできていただいた画帳、すべては縁、一期一会である。



鳴野橋



京橋



玉造口筋金門鳴野橋



『錦城二十勝』表紙



『大阪城八景』表紙



『華城八景』表紙